

【最優秀賞】

カーディガンへの想い

飯田みゆき・静岡県

よく晴れた秋の午後、納戸の整理をしていると、棚の奥から茶箱が出て来た。

箱の中には大小様々な色毛糸の玉。編み物好きの母がこまめに保存して置いた物だ。そ

の中に拳大の臓脂色の玉を手にした私は、遠い日ある人との懐かしい思い出を甦えらせた。

「お姉さん、一寸待つて、待つて下さい」

それは終戦の年の暮れの夕方、下校途中の私は道端に佇む女性に呼び止められた。が、次の瞬間「買い出しだ」と気付くと私は急ぎ、其処を離れようとした。

「朝から歩き廻つてもお芋一つ買えません。何処か売つて下さる処、無いでしょうか」

その人は私に追い縋り必死に訴え続ける。

戦中から続く食糧難は終戦の年、空襲で農作業が出来ず極度の不作だった。農家でさえ穀物の供出後は家族が食べるのが精一杯の有様で、その上戦災に遇つた親族を抱え、連日食糧を求めて訪れる「買出し」の人達を、断るのに苦慮していた。

しかし私は追い縋るその人を見捨てられず、一軒程先の我が家へ伴つてしまつた。

案の定、祖父は私の軽率さを叱り「断れ」と命じたが、疲れ切つたその人を見た祖母は、家に招じ入れ夕食用の熱い雑炊をすすめ、手早くあり合わせの甘藷や大根、小麦粉などを袋に入れ中年の上品な女性に

「夜道は物騒だで、早う行きなされ」と。

涙に咽び乍ら雑炊を平げた彼女はその後、祖母を頼つて足繁く我が家を訪れる様になり、次第に家族共親密になつていつた。

東京大空襲で焼け出された彼女は、H市の知人宅に身を寄せる。しかし戦後暫らくして学徒動員で出征した一人息子の戦死を知る。

やつと復員した夫は失意の中病に倒れ、知人宅に預けて置いた焼け残りの僅かな品物だけが頼みの綱。しかしそれも日毎に減つていく。H市も大半が焼け野原。幸い知人宅は類焼を免れたが食生活は極限状態で「切羽詰るといふ此方様へ足が向いて」と彼女は詫びる。

最初は祖母の行為を快く思つていなかつた祖父も、事情を知ると態度を一変させ、

「今に世の中も定まるから」と元気づけ、代金は一切受取らず、農家と「買出し」の域を超えた温かい人間関係が育つていつた。

しかし一年余り過ぎたある日、彼女は突然「一人の遺骨を持つて郷里に帰る決心をしました」と告げ、「今迄のお札に」と、持つて来た包みを私に差し出した。そして、

「私は若い頃から編物が大好きで、家族や他人様の物も沢山手掛けました。これは毛糸

が無くなる直前、手に入れた物で最後に編んだ上衣うわぎです。大学生の息子に好きな人が出来たら是非着せたいと思って……だからこれだけは食糧と代えられなかつた。でも、あの寒い夕方、貴女にお会いしなければ私達は餓死したかも知れません。恩人の貴女は「迷惑かも知れないと、私はどうしてもこれを着て頂きたいのです。どうか貰つて下さい」涙と共に語る彼女に困惑している私を見て、

「それを手放して今後貴女はどうなさる」と祖母が声を掛けると、彼女はきつぱりと、

「夢を断ち切つて一人で生きる積りです。」

そして彼女は包みを解き、目の覚める様な膾脂色のカーディガンを取り出すと、呆然としている私に着せかけ背を撫で乍ら、「これは貴女の為に編んだ様な気がするわ。寸法もぴったりだし、本当にお似合だもの」

母のかすり絆の着物で仕立直したモンペ姿で通学していた私は、美しいカーディガンの出現に我を忘れ、その魅力に有頂天になり、

「嬉しい。有難うございます。大事に着ます」と大喜びして受取つていた。

家族皆で彼女を見送つた後、祖母は、

「大事に育てた息子の幸せな将来を夢見て、編棒を運んだ楽しい日があつたろうに、戦争は余りも惨く切ないのう。それにはあの人の想いが詰つとる。一生大事に着んとな」我に返つた私は、言葉無く立ちつくした。

学校を卒おえて私は教師になつた。しかし、現代では想像もつかぬ物不足の中、まともな洋服も無い私が唯一、胸を張つて本物の良さを誇示出来たのが、カーディガンだつた。

品格のある色調、編み込まれた漸新な模様はセーターにもブラウスにもよく合い、若い私に華やぎを添えてくれた。そして冬、隙間風の吹き込む音楽室でピアノを弾く私の背を、ふんわりと優しく包む人のを感じた。

それは教師になつた私が、早速彼女に感謝と近況を知らせたが、暫らくして手紙は「受取人不明」で戻つて来たからだつた。

巷に物が溢れる様になつても、カーディガンの由来を熟知していた母は、セーターやベストに編み直し、彼女の心情を生かし切つた。

縁側で私の膝に転がる夢の名残の毛糸の玉と戯れ乍ら、七十年前には「こんな事実もあつた」と、次代に語り残したい私がいる。